

満藏寺

寺号 真言宗智山派香取山薬王院満藏寺

本尊 薬師如来像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、粕壁宿最勝院末、香取山薬王院と号す。

開山榮眞は延宝四年【一、六七七】寂せり、弥陀を本尊とす。

「梅若社」もとは村民式右衛門と云者の宅地内、古隅田川堤の上にあ
りしが、その家断絶して、数年の後、享和元年【一、八〇一】当寺へ移

せし由、是世に伝ふる梅若塚の古跡にして、隅田村木母寺にある梅若塚は、当所の写しなりといひ伝ふれども

とより證となすべき記録もなく、且隅田村の梅若塚の古きことは、【回国雑記】【梅花無盡】等にもものせて、文明の頃は早世に聞こえたる古跡なれば、当所の写しとは云べからず、かかる著名のことはややもすれば、競ひて妄作せるならひなれば、古隅田川堤ありて、昔の奥州道と云より附會したる説なるべし、ことに当所の古隅田川と云も、僅か二三村許りにかかる川にして、水上の分流せる所と、流末の筋等定かならざれば、もとより信ずべきものなし、地藏堂・庵一字。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「満藏寺」新方袋村北方にあり、新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝

院末派なり、天延二年【九七四】中、祐閑開基創建すと云ふ。文化九年【一、

八一二】四月焼失し、文政九年【一、八二六】四月、僧祐遍再建せり。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

『新編武蔵風土記稿』にも記されている「梅若塚」の伝説について、故

老の言い伝え

によると、応永三年【一、三九六】にこの地に居住していた豪農【江戸時代の新方袋村

の名主】山口義弘が版木に刻したという『梅若塚略記』がある。【現在も山口家に保存されている。】文を解読すると次のとおり。

「梅若塚略記」隅田山梅若山王権現と申し奉るは、人王六十二代村上天皇の御宇、北

白川吉田の少将惟房卿の御子なり。御母は美濃の国、野上の宿長者の娘にて、花子の前と云ひし人なり、常に子無きことを嘆きて近江の国なる日吉山王権現に祈念のため籠りけるが、満夜の夢に、宮殿より梅花のごとく薫りあるもの出でて、口中に入りぬと覚えて夢さめりけり。その後程なく懐妊して、同帝の御宇、応和三癸亥年【九六三】七月七日男子出産す。よりて梅若丸とぞ名づける。かくて父母いつくしむ事限りなし。父惟房卿は、梅若丸五歳にならせ給ふ秋卒し給ひにき。六十三代冷泉院の御宇、安和二己巳年【九六九】の正月二十九日、比叡山月林寺に学問のために登らせ給ふ。時に御年七歳なり。かくて十二歳にならせ給ふ。

六十四代円融院の天延二年【九七四】甲戌の二月、信夫の藤太と云ふ人、梅若丸の容貌

美麗をいつしかかいまみて、いづちかに連れて行き売らんかとおもひて、

或時、母の使

ひに来しものぞといつわりて、梅若丸を呼び出し、哀しむをも顧みず、武蔵の国と下総

の国との境なる隅田川の辺りまでつれ来たりしが、梅若丸は、母を慕ふ余りに重き病と

なりて、進みがたくて打ちふしければ、遙かにゐてこしかひもなしとて、

藤太は梅若丸

をこの隅田川に沈めて、その身は何くともなくいにけり。あはれ梅若丸は逆巻く水に流されて、溺れ死なんより外なきに、幸に、懸けさせ給へる御守の柳の枝にかかりたるを

手どりて、岸にぞあがらせ給ひける。此の柳をそも守掛けの柳とぞ云ふ。

これ新方の郷に有り。その柳のもとに臥し居給へるを、里人憐びて薬など

与へける時、何人ぞととひければ、我は、吉田の少将惟房といふ人の子なりけるが叡山に侍りし時、

藤太といふ者いつかはかりてかかる処につれきて、憂目をみする事ぞと云ふに、いとあわれに堪へ難くて、里人うち集り、とかくしけるかひもなく、終にうせ給ひぬ。時は天延二甲戌年三月十五日なり。御年十二におはします。此処より西の方に小庵を結びける祐閑といふ僧をたのみて塚をいとなみ、桜をその墓に植ゑてあとをぞとぶらひける。これ所謂梅若塚なり。同三乙亥年三月十五日、御母花子前は、梅若丸の行方を尋ねて此処に來りて、念仏の声を聞きて、なにぞと里人に問いけるに、云々と答へければ、これぞ我が子梅若丸ならんと泣きかなしぶ事限りなし。かの僧、祐閑のもとにまかりて、一周の忌をとぶらひ、直に師として剃髪して尼となり名を妙龜と改め、小堂をいとなみて、梅若丸の守本尊の地藏を安置して、亡きあと

そとぶらひける。或る時、妙亀、新方と春日部との境なる一本杉のもとに一つの池あり、そこに、都鳥のむつまじく遊ぶをみて、

くみしりてあわれとおもへ都鳥、子に捨てられし母の心を

と詠じけるほどに池上に梅若丸の姿の頭はれければ、おもわず池に飛び入りて、この妙亀もうせ給ひきに、よりて、この池を妙亀池とも鏡の池とも云ふ。祐閑はまた、この二人の為に深く仏心をこらして読経しけるが、一夜の霊夢に、童形の人來りて云ふ。我が守りの地藏尊は、吉田家伝来の黄金仏にて、安産疱瘡を守護し、乳不足のものは供米をいただき、隅田川の水にて粥にして与へなば足らずといふことなしといふに夢さめぬ。

祐閑は、いと不思議なることとおもひ、是れ即ち梅若丸なりとて、いよ
いよ尊くおも

ふ余りに、祠をいとなみて、隅田山梅若山王権現と崇敬し奉るなり。

遠近の士民、群集して、祈念するに靈驗なしといふ事なし。地蔵尊は、

祐閑上人、い

たくおしみて、木像を彫刻して、黄金仏をその胎内におさめ奉りき。これ
今におはしま

す所の地蔵尊なり。仰ぐべし、たふとむべし。

○応永元甲戌年八月、暴風にて、いにしへの御墓じるしに植ゑられける桜は、
吹き折られけるが、同二年、若枝生じて、やうやうに、しげりなむ。

かかること、往古よりの書伝など多くあれど、年久しくなりぬれば、或
いは損じ、或い

は、しみの住家となりて全からざれば、此彼を抄録して、その大旨を記
しおくになん。

応永三丙子三月 武蔵国埼玉郡多々羅庄新方 山口義弘

◎註 この略記から推定して、「満藏寺」の創建は『武蔵国郡村誌』にも記載されている天

延二年が正しいと思われる。『新編武蔵風土記稿』では、隅田村の木母寺に関わる

『回国雑記』・『梅花無尽蔵』という書物が刊行されているところから、当寺の新

方袋村の名主より書上の文面にある『梅若塚略記』を無視して編纂されたと推定
する。

『寺の宝』

お葉付銀杏 【埼玉県指定天然記念物】

梅若塚 【寺の門前右手の塚】

梅若地藏尊【境内左手のお堂】

海善院

寺号 真言宗智山派別埜山西明寺海善院

本尊 阿弥陀如来像 作者年代不詳

大日如来像 高さ三尺の坐像の胎内に弘法大師真作の聖観音像…

五寸納奉

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、百間東村西光院末、別埜山西明寺と号す。開山宥範、天正元年【一、五七三】八月廿一日寂す。本尊弥陀を安ず。鐘楼安永六年鑄造の鐘をかく、寮弥陀を安ず。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「海善院」村の西方にあり、新義真言宗埼玉郡百間東村、西光院の末、永禄年中【一、五五八】宥範なる者開基創立すと云、其後元禄年中堂宇大破せしを以て再建すと云ふ。と記されている。

『寺の伝記』

この寺の創建は、享保二年【一、七一七】の住職秀長和尚が寺社奉行に書状の覚え書

きが寺に残されている。これによると中興の祖宥範十五世は永禄三年【一、五六〇】に寂すとあり、開山は行基と記されている。『新編武蔵風土記稿』

には、開山宥範とあるが、
墓石には中興開山が事実であると思考される。

その他

寺の脇にある「香取神社」の鳥居がある場所は、往古の古街道【鎌倉街

道：奥州街道

の名残りと伝えられている。

心光寺

寺号 浄土宗大瀧山心光寺

本尊 阿弥陀如来像 作者年代不詳

脇仏 観音菩薩像 作者年代不詳

勢至菩薩像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗、加倉村浄国寺持、本尊阿弥陀を置く、

境内に東照宮の御宮あり、これ寛文九年【一、六六九】当村開発の為、願ひ上
て建立し奉ると云、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「心光庵」村の西方にあり、埼玉郡加倉村浄国寺の持

なり、と記されている。

『寺の伝記』

寺の言い伝えによると、この寺は大職冠藤原鎌足の後裔、中村太左衛門

重政が建立し

たと伝えられている。中村太左衛門とは、豊臣時代の三老式部少輔中村一氏の孫、中村重則の三男として、泉州日根村熊取谷にて出生、十六歳の時、武士を志して、泉州を離れ東国に下ったが、志を遂げ得ず、後に棟梁となり、日光東照宮の靈廟造営に参加、任を終えて帰国の途中、粕壁宿を通過の際、谷原沼を見て、新田開発を志、この旨を幕府に上申し、寛文九年に耕地数百町歩の開発を完成した。その開発完成と同時にこの寺を建立したと伝えられている。

◎註 中村太左衛門については、『新編武蔵風土記稿』に、当村名主の先祖多左衛門なる

者、元は工匠を業とせしが、寛文九年日光御宮御修営の事に預かり、

功竣て後賞

所新開こと願

として若干の金を賜へり、其金を無益の費に失はんことを恐れ、当所新開こと願ひ上げれば、願のごとく御免んありしゆへ、則新墾する所なり。と記されている。

この谷原新田開発には、中村氏と高田三郎氏が開発した新田である。

『寺の宝』

子育地藏尊 【北向き地藏尊ともいう。】

観音菩薩像 【聖観音菩薩・如意輪観音菩薩像：石仏】八体。

この中で七体は、貞亨四年【一、六八七】。一体は寛政九年【一、七九七】に建立されたもの。

福 藏 院

寺号 真言宗智山派稻荷山観音寺福藏院

本尊 阿弥陀如来像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、長宮村大光寺末、稻荷山観音寺福藏院と号す。

中興開山賢弘、天正十九年四月廿九日寂。本尊阿弥陀を安ず。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「福藏院」村の西方にあり、新義真言宗長宮村大光寺の末派なり。

『風土記』には、中興開山賢弘、天正十九年四月廿九日寂すと云ふ。と記されている。『寺の伝記』

現代になって寺が焼失したので記録もなく、現在は無住で大光寺が兼任しているので子細は不明。現在は仮堂で地元町内会の集会施設として利用されている。

浄泉寺

寺号 浄土宗照霑山淵地院浄泉寺

本尊 阿弥陀如来坐像【木彫】 作者年代不詳

脇仏 観音菩薩像 【木彫】 作者年代不詳

勢至菩薩像 【木彫】 作者年代不詳

善導大師像 【木彫】 作者年代不詳

法然上人像 【木彫】 作者年代不詳

地藏菩薩像 【木彫】 小野 篁作

薬師如来像 【木彫】 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗、高岩村忠恩寺末、照霑山淵地院と号せり、本尊弥陀を安ず。庵弥陀を安ず。浄泉持なり、神明社、村の鎮守にて、浄泉寺持、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「浄泉寺」増戸村の坤の方にあり、浄土宗埼玉郡高岩村忠恩寺の末派なり、開基は応永十九年【一、四一二】、創建は天正十七年【一、五八九】岷波和尚にして、本尊地藏、小野篁の作。と記されてい

る。

『寺の伝記』 「一」

この寺の開基・開山については、不詳であるが、寺に保存されている板碑【青石塔婆】を見ると、鎌倉期から室町期に至る元徳・建武・康元等の年号が刻まれているので、推定するに、この寺は中世に設立されていたものと考えられる。『武蔵国郡村誌』に記されている、開基は応永十九年とあり、この頃庵が創立されて後の天正十七年岌波和尚により、一寺として創建されたものと思われる。

「二」

故老の伝えによると、この寺は大正中中期から昭和初期は無住の寺で、この間は浄土宗の寺が一時兼務していたという。後に峰山大承和尚が住職と

して赴任し、荒れ果てた寺を修築したと伝えられている。現在の本堂は平成二年再建された。

「三」

寺号の中で淵池院という称号があるのは、この寺の脇に昔、荒川の氾濫により出来た沼【赤池ともいう】底無し沼で付近の住民に恐れられていた場所で、池面には蛇莖という藻が自生しており、蛇が多く生息していた【現在は区画整理により、開発行為がされて池は消滅した】沼の淵に建立された所から、この称号が付けられたと伝えられている。

その他

『地蔵菩薩像の伝説』

この地蔵菩薩についての伝説がある。年代は不詳であるが、荒川の氾濫により洪水となり、この地蔵菩薩像が、増戸村と平野村【現在の岩槻市南

平野】の境に流れ着き、平野村の住民が尊像を引き揚げようとしたが、尊像は動じないので、増戸村の住民が引き揚げると軽く引き揚げることが出来た。そこで、増戸村の住民が、このお地蔵様は増戸村に、お祠されることを望んでいるのであらうと感じ、以来増戸村内にお祠りして、香華を手向け村民の信仰するところとなった。地元の人達は、このお地蔵様を子育て地蔵として篤く敬い、特に子供の夜泣きに靈験あらたかで、夜泣きに悩む親達は、今でもこの地蔵尊に願いを掛けて、子供の夜泣きが治ると、お札に「ヨダレ掛け」を奉納している。

この地蔵尊が漂着して、引き揚げられた場所を地元の人達は『地蔵淵』という名称で呼び、今でも高齢者は、その名で呼んでいる。

豊春地区の寺の概要

豊春地区には、近・現代になって創建された寺があるが、ここでは省略する。

尚この地区には、江戸時代に存在していた寺が、明治初期の廃仏毀釈令の措置により、無檀。無住の寺が廃止された。次のとおり。

地蔵院【上蛭田】

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、粕壁宿最勝院末、愛宕山と号す。

本尊地蔵を安置せり。と記されているが、明治以後は『武蔵国郡村誌』に、「地蔵堂」と記されて、現在も墓地とお堂が豊春駅の近くにある。

東光院【下蛭田】

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、長宮村大光寺門徒、瑠璃山醫王寺大日坊と号す。

開山は盛運とのみつとふ。中興開山は祐永、慶長元年寂せり、本尊地藏を安置せり。「薬師堂」本尊は、行基の作なり。と記されている。『武蔵国郡村誌』には、古跡「東光院廃跡」、新義真言宗埼玉郡長宮村大光寺の末派なり、明治七年廃寺となす。と記されている。現在は、「薬師堂」が残されていて、下蛭田の獅子舞の出発地となっている。

寶藏寺【増戸】

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、長宮村大光寺門徒、明王山と号す。本尊、

薬師を安ず。と記されている。『武蔵国郡村誌』には、「寶藏寺」村の西方

にあり、新義真言宗埼玉郡長宮村大光寺の末派なり。と記されているが、その後火災により焼失して廃寺となり、本尊は「浄泉寺」に保存されている。

東西寺【花積】

『新編武蔵風土記稿』には、天台宗、東叡山の末、薬王院と号す。本尊阿弥陀、春日の作と記されている。『武蔵国郡村誌』には、「東西寺」村の西方にあり、天台宗埼玉郡慈恩寺村慈恩寺の末派なり、と記されているが、昭和五十年頃無住の為、放火により焼失した。

浄法庵【谷原新田】

『新編武蔵風土記稿』には、粕壁宿最勝院持、延宝六年造立すと云。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「浄法庵」村の中央にあり、埼玉郡粕壁宿最勝

院の持なり、と

記されている。現在も庵として残されている。